



本棚の隅の「愛蔵書」

佐藤二雄著

『テレビとのつきあい方』

岩波ジュニア新書

辻脇 葉子^x

花火のごとく夜空を彩る米軍機による空爆、原油まみれで真っ黒になった海鳥。メディア戦争ともいわれた1991年の湾岸戦争のテレビ報道である。そして1995年、阪神高速・ビルの倒壊、焼け跡、避難所と、阪神大震災の被害映像は繰り返し放送された。マス・メディアの中でも特に、なまの映像をリアルタイムで報道するテレビは、私たちが「現実」を目撃しているかのような臨場感をもたらす。

しかし、テレビが映しだすのは、現実の一部を切り取った「^{ヴァーチャル・リアリティ}仮想現実」でしかない。むしろ一部を切り取り強調したがために、隠れてしまった現実がある。本書は、その現実を見透かしテレビを批判的に読み解く能力、すなわち「テレビ・リテラシー」の必要性を「具体的事実在即して・分かりやすく」説いている。

日本人のテレビ視聴時間は、95年のNHK調査によると一日平均3時間45分に達する。他方で、本を読まない中・高生、大学生が増えているといわれて久しい。最近ではマンガ離れさえ生じているという。

わが家にテレビが初めてやってきたのは、息子が小学2年生の時であった。それまでは、子どもと過ごす夜の時間は、童話や昔話の本か、トランプ等のゲームと決まっていた。しかしテレビの到来とともに、どこの家でも見られるテレビとの抗争が始まった。

曾野綾子著『太郎物語・高校編』の山本家では、ある日、父親がテレビを庭に叩き付けるといふ奇襲に出た。太郎の生活を支配していたテレビは、ただの機械の残骸となり、しばらくすると、することもなく「退屈のあまり彼はしょうこと無しに本を読んだのである」。

山本家ほどの思いきりのよさが無いわが家では、本書を、息子の「愛蔵書」にと考えた。しかし、今だ読まれないまま本棚の片隅に押しやられている。ときおり、本棚の目の付きやすいところに移動させているのであるが、気づいているだろうか。

xつじわき・ようこ / 短期大学助教授 / 刑事訴訟